

承元の法難考

——起因と宗祖遠流の背景について——

本願寺派 今田 法雄

(一) その起因について

いわゆる承元の法難は承元元年（建永二年）一二〇七に起った一大事件である。

約八百年前、宗祖親鸞聖人だけでなく法然上人や門下の死罪流罪にいたった起因については謎が多く、その人数、日時についても諸説があるところである。

宗祖の生涯においてこの法難のウエイトがいかに大なるか『教行証文類』の後序の内容に明確であり、師法然上人と、教えとの出会いや、法難による離別の記述は、人生の多くを記録しない宗祖にとって例外的といえる。

ただ承元の法難に関しての記述は抽象的であり、なぜか透明度を低くした感もある。

一般に法難の起因とされる通説は、建永元年（一二〇六）年末に、後鳥羽上皇の熊野御幸の留守中、院に仕える女官二人が無断で、六時礼讃の行事に参加、出家した事から始まる。京都へ還御した上皇がそれを知り激怒したという伝承は広く伝わっている。

六時礼讃を主催していた住蓮、安樂は法然門下であったため、女官出家の事件は浄土宗弾圧へと発展し、法然門下の死罪、流罪にいたる事は周知の通りである。

ところがその死罪流罪までの事件の始終には通説が多く、謎だらけといつてよからう。

後鳥羽上皇にとつて女官二人は特に寵愛の二人であったとも伝わるが、実際には上皇には「亀菊⁽¹⁾」という寵愛の女官が実在したといわれ、承久の乱の際も隠岐に同行している。

有名な松虫・鈴虫という女官二人の名も江戸期から親鸞伝に登場するものである。

ただ当時の六時礼讃行事が貴族屋敷で行われ、女性にも人気があった点は確かであり、都の中で諸々のうわさの元となつていたと想像出来る。つまり住蓮・安樂の布教スタイルが一大法難の起因の一つというのは否定出来ないであらう。

また当時の後鳥羽上皇には、それまでに南都北嶺の圧力が存在した事も確かで、興福寺奏状は、浄土宗批判の代表的行動でもあった。

よつて承元の法難が住蓮・安樂だけの罪でない事は理解出来る。ただ多くの研究者が指摘しているごとく、僧侶の死罪は重刑すぎるといえる。通常ならば住蓮・安樂は遠流の刑として、宗の代表の法然上人は近流又は叡山預りという形でもおかしくはない。

私はここで歴史の大きな背景を感じている。それは右に通常と記したが、その通常でない事情が、後鳥羽上皇に当時あつたのではないかという事である。私が注目したのは院政四代の中で後鳥羽上皇の異常な頻度の熊野御幸である。資料Aを参照すると⁽²⁾。

(資料A)

○熊野御幸 院政四代

白河上皇 九度 ・在院四十四年

鳥羽上皇 二十一度・在院二十八年

後白河上皇 三十四度・在院三十四年

後鳥羽上皇 二十八度・在院二十四年

右で気付くのは後鳥羽上皇が年一度ならず二度も熊野御幸を實行している点である。

熊野御幸は大イベントであり、その費用と道中の住民の負担は大変なもので、村々の中には全員で離散をした例もあった。この事から貴族の中にも熊野御幸の多さを批判する者もあったが、とにかく後鳥羽上皇は熊野に執着している。私はこの上皇の熊野御幸の異常な頻度を、軍事政策と考えているが、同じ考え方がすでに昭和六十三年に、西世賢寿氏によるものがある。西世氏の論では

「熊野三山は、信仰だけではなく、政事力、軍事力、経済力を合わせもつ、大きな社会的勢力であった。しかも、都では想像もつかない呪力と技術力を持つ熊野の山の民、海の民をも統率していたといつていいだろう。とすれば後鳥羽上皇の院序下し文に寄せた三山への特別な好意は、なにを物語るのだろうか。それは、とりもなおさず、心中、深く倒幕への野望を秘めていた後鳥羽上皇が、それら熊野勢力を、自らの手におさめようとする布石のひとつにほかならなかつたのである。

——中略——

彼の生涯二九度にわたる熊野御幸は、これまで見てきたように、この討幕計画の布石であつたことは明らか

である。それは熊野三山の衆徒や水軍など強力な軍勢力を味方につけることが直接のねらいではあつたらう。⁽⁴⁾右、要点の部分のみであるが、後鳥羽上皇の不自然な当時の熊野御幸の謎を解かんとしている。ただこの西世氏の論は住蓮、安楽の死罪など法難に関わる点までは論じていない。史料不足であるが、承元の法難への発展については私見を述べてみたい。

後鳥羽上皇の生涯計二十八度の熊野御幸を一覧にしたものを見ると。⁽⁵⁾

(資料B)

後鳥羽上皇御幸一覧 計28回 (●は2回の御幸が実地された年)

建久九年	一一九八	八月一六日(古記部類)	上皇一九歳	
正治元年	一一九九	八月二〇日(猪隈関白記)	頼朝亡	
正治二年	一二〇〇	十一月二八日(猪隈関白記)	「御家人」間の争い	
建仁元年	一二〇一	一〇月五日(熊野御幸記)		
建仁二年	一二〇二	十一月二九日(猪隈関白記)		
●建仁三年	一二〇三	三月一〇日(明月記)		
●建仁三年	一二〇三	七月九日(明月記)		
元久元年	一二〇四	九月一七日(明月記)	源頼家暗殺	七月 七箇条起請文 一一月
元久二年	一二〇五	九月	(明月記) 興福寺奏状	一〇月
●建永元年	一二〇六	五月一日	(三長記)	
●建永元年	一二〇六	二月九日	(明月記)	上皇二七歳 住蓮・安楽六時礼讚事件
承元元年	一二〇七	一〇月一日	(百練抄)	
承元二年	一二〇八	六月三日	(明月記)	
承元三年	一二〇九	九月二日	(猪隈関白記)	
承元四年	一二一〇	一〇月一四日	(百練抄)	

●建暦元年	一二二一	一月三〇日 (猪隈関白記)
●建暦元年	一二二一	一月三〇日 (明月記)
●建暦二年	一二二二	八月二十四日 (明月記)
建保元年	一二二三	九月二十七日 (明月記)
建保二年	一二二四	九月二〇日 (百練抄)
建保三年	一二二五	一〇月八日 (百練抄)
建保四年	一二二六	八月二十六日 (百練抄)
建保五年	一二二七	九月三〇日 (百練抄)
●建保六年	一二二八	一〇月二三日 (百練抄)
●建保六年	一二二八	二月二三日 (業資王記)
承久元年	一二二九	一〇月一六日 (百練抄)
承久二年	一二三〇	三月五日 (玉藥)
承久三年	一二三一	二月四日 (玉藥) 承久の乱 五月 後鳥羽上皇 隱岐に流罪 七月

資料Bを見ると、若き後鳥羽上皇の政治的立場にプレッシャーがある前後には年二度の熊野御幸が実行されている。

建仁三年(一二〇三)の場合は、源頼朝の没後、鎌倉で、御家人同士の権力争いが激しくなった頃である。

また建永元年(一二〇六)の二回御幸に関しては前年の興福寺奏状や、その前年の源頼家の暗殺によるものと考えられる。上皇にとって同年代の若き頼家が、後家人勢力に殺されるというのはショックであったと思われる。

頼家は鎌倉二代目の立場であったが、形としては僧侶が寺で殺されるというものであった。

鎌倉の新勢力の非情さと強い実行力は、政治力を奪われた京都の院政側としては強い対抗意志を示す必要があったといえよう。

若き後鳥羽上皇にとってその強い実行力を示さんと考えつつ建永元年（一二〇六）の二回の御幸を終えて京都へ還御した、その時、住蓮・安樂の六時礼讃事件が起こっており、必要以上に都中の噂になっていたのである。

事実確認や公正な裁きよりも、急ぐは院の權威が優先し、法然門下の死罪流罪が実行されたと考える。少なくとも後鳥羽上皇の院政が無力と鎌倉側へ映らなかつた事は確かである。鎌倉は常に京都を注視していたと思える。

法難の五年後、建暦元年（一二一一）にも二度の御幸を実行しているが、この年の上皇の心中はよくわからない。ただ承久の乱の三年前の建保六年（一二一八）の二度の御幸は、いよいよ倒幕を意識しての行動であろう。

熊野御幸についてここで忘れてはいけないのは、御幸の日時とルートは上皇の独断によるものではなく、京都の陰陽師によって決められたという事である。逆に考えれば、上皇の周辺の知識人や、臣下達が、上皇の秘めた思い（倒幕）を支持していたか、又は、勧めていた可能性もあったという事である。

当時の熊野の軍力は、源平の争いを決める程であり、上皇にとって、南都北嶺の軍勢力と共に味方に付いてもらわなければならない相手であった。

鎌倉幕府成立により、公家から武家そして執権政治とならん時代に、何とか後鳥羽上皇は、鎌倉を倒したいと考へてつづけたのであろう。

源頼家の暗殺は上皇にとつても衝撃であり、あせりが生じた上皇は倒幕への本心を隠し、私憤の形で、法然門下の死罪流罪という極端な刑を下したと考へている。

承元の法難は、後鳥羽上皇の鎌倉へのメッセージであつたともいえよう。承元の法難の起因は数々あると考へるが、その主因は、上皇のあまりに無謀な倒幕という目的の嵐に巻き込まれたと考へて間違いないと思われるのである。

(二) 宗祖遠流の背景について

次に(一)に関連して、承元の法難における法然門下の死罪流罪の中、なぜ宗祖親鸞聖人の北国遠流が決定・人選・実行されたのか、この点は確実な資料がなく真実史の謎の一つとなっている。

浄土宗の代表である法然上人や、礼讃で世に知れた安楽など、南都北嶺や朝廷など権力側から名指しで人選された事は、十分理解出来る。宗祖が選択付属されたのも法難の二年前であり、外部からは無名に近い立場であったと思われる。研究者により数々の説が見られ、その中、宗祖が一念義的立場であったゆえとの論考もあるが、遠流という重刑にいたるほど目立ったトラブルは起こしていないといえよう。

ここで私は流罪の人選について、権力側から一部の人選を浄土宗側か、第三者に預けられたのではないかと……と想起してみた。つまり浄土宗内に詳しい人選メンバーか、仲介メンバーの存在である。

前述したごとく、承元の法難は専修念仏のみ弾圧したものでなく、その目的は当時の幕府や熊野などの宗教軍事力の動向が複雑にからみあう背景を指摘した通りである。法然上人ほか、著名な門下以外は上皇や権力者側から見れば、人選よりも実行(院の権威)が最優先であったと考える。

宮井義雄⁽⁷⁾氏はその点、親鸞聖人の東国行きを実現させたのは覚信尼につながるのがある宇都宮頼綱ではないかと論じている。頼綱は法然門下で坂東武者であり、宮井氏の説は興味深いが、この説は北国行きは別の立場である。

私見ではあるが、前に仲介グループと表現したが、日野ネットワークのような形が存在し、宗祖をサポートしていたのではないかと考えている。法然門下にも日野氏ゆかりの人物も数人確認出来ると同時に、北国遠流の直前に越後権介に任せられた日野宗業の人選など、その空気を感じている。つまり日野家ゆかりの宗祖と専修念仏の教え

を守るためにあえて宗祖を選んだというものである。

数年前『教行証文類』の坂東本（行巻）をじっくり観察出来た際、その料紙に微野線がきれいに入っている事実
に驚き、この料紙は宗祖が単に高級紙を入手したというレベルではなく、これは在京のかなり地位のある人物が、
贈ったものではないかとも考えてみた。

在京の地位のある人物とは前述した日野ネットワークの代表格、あえて挙げれば、日野頼資（一一八二―一二三
六）である。

宗祖より九歳若い頼資は当時活躍していた日野流藤原氏の雄である。日野流藤原氏は当時、熊野信仰が特に熱心
な一族として知られ、頼資自身生涯二十二回も熊野へ参詣している。また頼資は兄の資実と共に承元元年二月に熊
野へ出発している。この時期は正に法然門下の死罪流罪が実行され洛中が騒然としている頃である。この兄弟は生
涯において意外な行動が特徴的ゆえに、承元元年の参詣は裏があるように感じている。

頼資は、承元の法難の後も出世し、後鳥羽上皇や妃の供奉をするほどになるが、承久の乱では倒幕に参画せず鎌
倉よりとなりながら京都で出世を続ける。当時は上皇の重臣達は倒幕に参画しなくても、上皇ゆかりの人物として、
冷たく対処される事が多かった。ところが頼資は元仁元年（一二二四）には参議になり、翌年には権中納言となっ
ている。つまり鎌倉に人脈があると想像出来るので、宗祖の東国行にも関ったとも考えられる。佐貫庄は鎌倉の後
家人佐貫氏の荘園であったと伝わるので興味深い。このように宗祖の北国行をサポートしたのは日野頼資のような
立場にある者であったと考えられる。

さらに頼資の立場は倒幕の戦いで京都が焼土と化す可能性を知っているので、浄土宗専修念仏が残り、弘まるた
めにあえて宗祖にそのつらく、尊い役目を託したのではないか。

宗祖は叡山時代は冬の厳しい下積みが長く、恵信尼も晩年は越後で生涯を終えるなど、二人共寒地に縁があり、

独自の生活法を知っていたのではないか。

サポーター側は、宗祖遠流後に必要な教典類や料紙を送り続けたのではないだろうか。

頼資は宗祖帰洛直後に没するが、彼ゆかりの日野ネットワークにより、宗祖示寂の際は貴族生前会員制の東山五三昧処ごさいごで火葬したのであろう。五三昧処の名は高田本『親鸞伝絵』のみに記されるが、高田門徒は宗祖火葬に立ち会った立場であるので、五三昧処火葬は史実と考えてよからう。現役の藤原貴族でない宗祖がここで火葬出来たのは日野頼資が早くからサポーターしていたゆえと想像する。

こうした藤原貴族会員制火葬地は当時、日野にも日野南二十五三昧地が存在しており、両地は無関係ではないであろう。こうした日野一族の動向が、宗祖の人生最後まで見えかくれしているのである。

左の系図は実悟による『日野一流系図』⁽⁸⁾であるが宗昭(覚如上人)の三代前に系図上、頼資が記されているのは興味深い。この点は頼資が本願寺サイドから見ても全く無関係でない事を示しているともいえよう。ただこの系図は単に親子・血縁関係のみを表現したものではないので、なお研究を要す必要がある。系図の宗昭の右側にある宗恵は宗昭の父、覚恵であるが、彼の一代前の家光又は光国は宗恵の青蓮院入りを実現させた人物として知られる。その一代前の資実は日野頼資の兄であるが、彼も生涯二十五回も熊野行啓を果たした人物である。資実も宗祖サポーターとして候補となっても不思議ではないが、彼は日野一流系図に記されるごとく承久の乱の前年出家し世間から離れているように見え、貞応二年(一二二三)に没しているので可能性は低いといえよう。

以上、承元の法難に関して後鳥羽上皇自身の政治的立場から法難の起因を探ると共に、宗祖親鸞聖人遠流の謎を日野ネットワークの存在とサポーターの有力人物としての日野頼資まで私見を述べてみた。しかしこれらの説はまだまだ仮説の域を脱していない部分も多い。右に述べた日野頼資が現実には宗祖の生涯と全く関係が無い可能性もあるのも事実である。ただ頼資のような人物が、宗祖親鸞聖人の生涯のサポーターとして日野ネットワークと共

に表面に出ない形で存在した点については今後も確実な史料を基に探究したい。

註(1) 『徒然草』第二百二十五段に亀菊の名が見える。

(2) 『日本の歴史』週間朝日百科五九号所収(平成十五年朝日新聞東京本社刊)

(3) NHK歴史ドキュメント(8)所収(昭和六十三年)日本放送出版協会刊

(4) 西世賢寿氏は後鳥羽上皇御幸を二十九度の立場をとっている点は他の論考にも見えるが、一般には二十八回説が多い。

(5) 『日本宗教史年表』所収(平成十六年)河出書房新社刊

(6) 『徒然草』第二百二十七段に安楽の名が見える。

(7) 宮井義雄著『親鸞聖人』一七五頁所収(平成三年)春秋社刊

(8) 『真宗史料集成』第七卷五二二頁所収(昭和五十八年同朋舎刊)